海流の見える町　定価九八〇円

一九七八年三月七日発行

著　者　矢野栄蔵

発行者　宮石弘司

発行所　南方社

郵便番号　五六〇

豊中市岡町九番六号

電話〇六（八四一）五九二一

印刷所　株式会社小西印刷所

矢野栄蔵小説集　海流の見える町　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海流の見える町　7
玩具の船団　49
小鳩よ飛べ　73
花まつり　83
炎上　95

遙かなるイエーメンからの便り　141
雪の降る音　151
同姓　161
漫才二代目　185
明日の宴　195

カバー・扉絵　川口聖

海流の見える町

「大地、お前、漁師になるのか」

「先生。父ちゃが先生に言ったのけ」

「馬鹿たれ、お前が作文に書いているだろ、忘れたのか」

「先生。あれ嘘なんだ。何んでも書けちゅうから書いたまでだ。おらあはな、漁師になんかなんねえぞ」

ぼくの生れた町は米子市のはずれで日本海に面している。海に興味を持ったのは作文好きな先生が隣町から越してくる前からだった。父は焼き玉エンジンの木造船を一隻持っている。父の一日の仕事の始まりは雲の流れを見てからで、一本釣の出稼ぎに行くのである。父が気弱くなったのは漁業組合に頼みこんで、船を買った借金が出来てからだった。その日からは大きな魚を釣ってもぼくは食べさせて貰ったことがない。

「先生。おらあの作文、ぜんぶ読んでくれたのけ」

「あほか、採点した百点が読めんのか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「それならぼくの漁師止めたい気持わかってえな」
「おまえ、父ちゃに言わなかったのか？」
「何んでえな。言うひまなんかねえ。父ちゃはいつも留守で沖に出てるよ」
「父ちゃの仕事は受けたくないのか！」
「先生。体力ちゅう難しい話知ってるか。お医者さんがな。きつい仕事やと父ちゃに言ったのやど。ぼくが小さくて父ちゃから無理やと言われてる」
海をあきらめたのは、もっと訳があったが言えなかった。歴史の時間に先生が地図の話をしてから、図書室に行き、拡大された日本地図にもぼくの生れた村がないことを知っていたからだ。人口わずか五十。村の老人の持ち船十隻の漁業組合はある。隣町では網元といわれる親方が居るが、ぼくの生れた村の漁師に金を貸す人はもう居ない。蟹と烏賊が去ってから二十年。亡霊のようになった豊漁の再現に待ちくたびれほとんどが遠洋に出かける。漁師は魚の獲れない姿を子供にも見られ、愛想をつかされたりするのも年を取り過ぎているからだった。
「それならおまえ、上の学校に行くんか」

先生はぼくの返事も聞かずに教員室に入っていった。

村には小さな漁港がある。大きな港といえば遠くの境港である。役場は他所の良港のようにコンクリートの波止など作ってくれない。すべて砂浜に船は引き上げる。冬には日本海の荒波は海を灰色に変えてしまう。空が墨色にでもなれば万馬が駆けるように、波浪の先端を風に散らしながら海岸に押し寄せてくる。

ぼくの村は二つの山が海にせり出た間にあった。山は大刀で真二つにされた塊が分離したようにも見える。その間の小さな漁村の小さな港は、まったく偶然に選ばれた地形に居坐った感じがぼくにはあった。

「中三なら、親切に教えてやれば、漁船には乗れる！」先生の最後の言葉である。

ぼくが船に乗れないことは父が一番良く理解していた。嵐に会い、船が沈むほど水をかぶり、老朽したポンプ以上に桶で水を汲み出す必要がある。先ず取舵を覚えるのだが、父に協力して船に乗るより、ぼくが操縦術を覚えても父の体力の衰退を心配し、もし遭難すれば母一人になることを恐れてぼくを船に乗せなくなった。

中学三年の夏休みに進学クラスがあることに気ずいた。試験があれば百点をとる友達が

みんなぼくの廻りから消えてからだった。休憩時間にもグループ離れになっている。

「栄ちゃんは進級するんけ」親友に、君は高校に行くのだろうと聞きたかったが、自前の持船を五隻は持っている友達に聞くわけには行かなかった。

父は毎日、家に帰るのが遅い。夕方の空を読んで明日の天気を判断する。翌日は風の具合で沖に出ていくのだ。焼玉エンジンでもラジオだけは備えてある。だが父は楽しみにしていた放送も聴かなくなった。ぼくのことで金がいり、少し位の天候不順でも沖に出る。母は内職に組合の漁船が帰ってくれば、荷上げの手伝いから魚の氷詰処理までを請負制でやり賃金を貰っている。

夏が過ぎてから父は少しくらいの時化でも出漁するようになった。魚は海が荒れたときにはよく釣れ、無理をして出るのはぼくの就職先が決っていないからだ。出漁するのは貯金をしてぼくのために使うのだろう。

「栄ちゃんは何処の学校に入学するんけ」学校では同じことを毎日のように聞いた。

「関西だと。父かたの里など面白くねえど」

「おれ、まだ方針きまってねえど」

父が学校に呼ばれた。中三では職業の選択はまだ無理な年頃だから、学校と親の方で相談の上決定するそうだ。中学生は金の卵とか言われ企業の学校まわりや、職業安定所からもぼくには誘いがあったようだ。

「中途半端な大地やど。おっかあともよく相談してみよう。先生は中途半端な考えやった。やっぱりおれたち親子の考えが離れ過ぎてるそうだ。学校では工場勤めの固いところを大地にくれるんだど、よかったな」

職員室に入った父を心配して栄ちゃんと校庭で話しながら待っていたが、父は三十分ほどで現われた。父は学校を頼りにはしないと、ぼくにも栄ちゃんにも理解できるように話してくれた。

「街でうどん喰うか」ぼくと栄ちゃんに父は言った。本当は街はない。ビルの建つ本物の街は汽車で往くには距離がある。父のいう街は浜からは遠いが海風を避けて山に廻りこんだ地形にある。バス停のある通りが街だった。雑貨屋と郵便局と駄菓子屋と食堂がある。そこでぼくと栄ちゃんの別れの式を父はつくってくれた。

母の存在はぼくが町に去る日から浮上してきた。ぼくは一日のほとんどを海で遊ぶ。遊

びが母の手伝いになり家には食事だけに寄りつくだけだ。母は浜に上がった海草を拾ったり、父が釣り上げてきた魚の中から売れない雑魚を貰って干し、組合事務所に大漁の旗が昇ると手伝いに行く。

就職はぼくは母かたの里へ行ってから決めることになった。一人っ子では共同生活をさすのは無理だという母の主張が父を納得させた。ぼくの決まりかけた工場には学校から丁重に詫びを入れてもらったようだった。

「大地にこれをぜんぶあげるよ」母は柳行李に本をいっぱい詰めてくれた。仏壇の裏側の新聞紙にくるまった包みを開封しては、ぼくの読めそうな本を探しだしたのだ。

「かあちゃんはな、父ちゃんと恋愛結婚やった。ほれこの本に真実一路と題があるね。大地の名はこの本の教えからもろうたよ」

十四歳のぼくが生れて初めて村を出るのだ。人口五十の村からバスの走る国道に出ると三叉路がある。上の庄。下の庄。中の庄。それら地区の子の合同中学校の校舎がある通りである。学校の側を通りながら、バス停でぼくは只一人の友だち栄ちゃんとも別れの手

を握りあった。ぼくの懐には母の書いた叔母たちに渡す手紙がある。叔母たちは四人姉妹で、四女の母は不肖の妹であったと昨夜は泣きはらした眼でぼくに言った。

父も母も、実家に伝える細かい言葉までぼくに教えたが、バスを三十分後に降り、米子駅から山陰本線の汽車に乗ってからは、それらを考えないで修学旅行をしている気分だった。子供を旅行にもやれない生活から、母かたの里には父は行かなかった。父は忘れてしまったのか、ぼくは修学旅行の日に父のお供をして日本海に一本釣の遠出をしている。

城崎、和田山まわりで姫路を抜ける。そこで山陽本線に乗りかえ大阪へ向かう。ぼくにとって天と地が逆になるほどの風景の変化が驚異であった。今までは頭上のどこにも押さえつける建造物はなかったが、都会、都市、ビルディングと学習を思い出してくると、高層ビルまで倒れてくる感じがしてきた。

大阪から和歌山行の列車に乗った。裏日本と母かたの里は半日強の距離しかなかった。南紀の温泉地帯のはずれ、太地港に着くまでの下里に、外海に向いて建つ旅館が叔母たちの家である。近くの眺望のきく近代ホテルはリゾートホテルと横文字の名前になるが、旅館「広海」は名ばかりで今は木賃宿程度と、駅で買ったガイドブックには書かれてあっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com